

風間計博著

『窮乏の民族誌 中部太平洋  
・キリバス南部環礁の社会生活』

大学教育出版 2003年 xiv + 325ページ

たな はし さとし  
棚 橋 訓

本書は、中部太平洋キリバス共和国・南部離島タピテウエア・サウスに位置するN村の社会生活を巨視的な政治経済学的視座との切り合いの渦中に描いた民族誌であり、外部の巨視的なシステムに開かれた「開放系」として微小な調査地を捉え、現地の人々による解釈を取り入れて、世界システムの「最周辺」に営まれる社会経済の実相を描くことを目的としている。本書の基礎は、1994年6月に始まり、延べ13カ月間に及んで実施された著者の現地調査にあり、まずは総合研究大学院大学文化科学研究科に博士論文（1998年）として提出されたその成果が更なる熟成期間を経て本書に結実した。

巨視的な政治経済学的視座と民族誌の切り合い……と記すと、本書が、民族誌的情報を都合良く解体したうえで、その断片をフォーマットに則って世界システム論に整然と「接合」していくような、無味乾燥な仕事であるとの印象を与えてしまうかもしれない。しかし、本書の向かうところはその対極にある。「人間居住の限界領域に位置付けることができる」（20ページ）タピテウエア環礁で、「ストレスばかりが狂おしいほどに蓄積」する「単調な調査生活」（311ページ）を送り、「私自身の最も辛かった経験は何よりも『飢え』であった」（2ページ）とストレートに吐露する著者の筆致には、そこに生活する人々の日常的な顔と、恒常的＝構造的苦境に立たされた人々が社会生活を切り盛りしていく際に援用する論理の肌理を描こうとする勢いがある。その

勢いは、現地調査の過程で起こった微細な変化、人々の日常的な行動や発言、軋轢や対立の仔細に目を凝らして集められた情報に裏打ちされている。このような著者の取り組み姿勢が、民族誌的情報の総体を生かし、本書を潤いと厚みを持つ仕事に仕立てている。「飢え」の経験と実感から問題の所在を鮮明化してくる著者のスタンスには、（著者には到底及ばずながら、ポリネシアの小環礁社会で多少の調査経験を有する評者としては）賞賛を禁じ得ない。

本書を貫く視角は先に記した調査時の「飢え」の経験にあり、「飢え」の経験は著者において「キリバス社会の民族誌的研究と切り離すことはできない」（3ページ）。「飢え」の体験知を前提に、著者は、タピテウエア・サウスの極度な食料の欠乏はいかなるプロセスを経て起こるのか、また人類学的研究と関連づけながら、そのプロセスはいかに解釈されるのかということを優先されるべき研究課題に設定する。そして、以下のような本書の構成に沿ってこの課題は分析されていく。

はじめに

第 章 序論 人類学と政治経済学

第 章 「二重の窮乏」下の生活状況

第 章 集会所の多様化および現代的意義

第 章 饗宴の氾濫

第 章 在地の所有観念と平等性

第 章 貨幣経済と贈与の論理

第 章 考察 「二重の窮乏」下における在地の論理

第 章では、生産様式接合論の限界を論じ、従属論および世界システム論の再検討を経て、「世界システム論の取り扱わない微細な視点から、巨視的な背景に臨むことが人類学にとって戦略的な方法であること」（15ページ）を確認する。そして、世界システムによる外的制約と、周辺部末端の微細な事象に見られる主体的応答とを結ぶ「中間の輪」 受動的制約の下での自律性の論理が展開する場 と

して、世帯および社会の共同性の存在に着目することの重要性を指摘する。また、本章では「飢え」を生成する「第一の窮乏条件」 海拔2～4メートル以下で土地資源と淡水資源に乏しい環礁の過酷な自然環境に基づく生業経済の脆弱性（16ページ以降） と、「第二の窮乏条件」 「最周辺の周辺」にある島嶼国家のさらに離島部が被る慢性的な物資欠乏状態と政治経済学的な遠隔性（30ページ以降） を規定し、タビテウエア・サウスが「二重の窮乏条件」下にあることを示す。ここでは、オセアニア小島嶼国の地域経済モデルとして重用されてきた MIRAB 経済論 出稼ぎ移民（migration）・送金（remittances）・援助（aid）・官僚制（bureaucracy）の連動により個人レベルのレント収入に依存して持続が促されるような国民経済のモデルの批判的検討も為され、これに代わってキリバスのように出稼ぎすら定期的に送り出せない「最周辺の周辺」国の政治経済状況を記述するために、FFAB 経済 基金の運用益（fund）・外国漁船の入漁料（fish royalty）・援助・官僚制の連動により国家レベルでレント収入の獲得に奔走する国民経済のモデル の概念が著者により提唱される。そして、タビテウエア・サウスは首都タラワの官僚制の介入さえ不完全で、FFAB 経済の恩恵にすら十分に浴せない最末端に位置する状況にあることが確認される。

第 3 章では、30世帯180人を抱えるタビテウエア・サウス中央部 N 村の生活状況が、在地資源の限定性に起因する植物性食料（タロ、パンダナス、ココヤシ、パンノキ）の自給率の低さ、僅かな外国船出稼ぎ者や公務員を除いてコブラ生産に依存する経済状況、不可避的な輸入食料への依存、流通の不備による慢性的な物資の欠乏状況の4要素が織り成す悪循環から描かれる。

一方、首都に見られる FFAB 経済が途切れ、「二重の窮乏条件」に晒されているタビテウエア・サウスの人々は、単に犠牲者としてこの悪循環に身を委ね続けている訳ではない。離島社会内部にまで国家の官僚制が及ばない分、「在地の論理が社会内部に卓越し、外部の論理を」主体的に「受容したり遮断したりする余地」がそこには生じている（40ペー

ジ）。そして、外部からもたらされる「第二の窮乏条件」が在地社会サイドにとって制御不能な対象であるとしても、人々は在地の論理による社会の自律的編成を実施することで、窮乏状況への対処と生活維持を試みている。第 4 章以降では、こうした自律的な社会編成の内実が詳細に描かれていくことになる。

第 4 章では、村の世界をそのまま表象し、社会生活の中心に在り続ける集会所（mwaneaba）の現代的意義を問う。集会所は行政村、教会、学校等の各所に併設され、実質的にその集会所で各種機関の自律的運営に関わる合議（bowi）が催される。集会所のイベントでは地域の長老制という政治的権威が中核に据えられている一方で、平等な参加、平等な決定、平等な物資の分配が保証される平等性の原則が貫かれ、権威と平準化のバランスを維持する「集団的メカニズム」が発動する（134ページ）。合議の「集団的メカニズム」は中央政府とのやり取りにおいても発動し、集会所は首都を含めた外部世界の要素を一括して受け止めて遮断し、在地の論理で読み替えながら社会に取り入れる濾過装置の機能を果たしている。集会所を舞台にそれぞれの社会集団は人々の声を収斂して求心化し、社会生活の再編成が積極的に進められていく。

第 5 章では、共食を伴ってあらゆる場面で頻繁に催される饗宴（botaki）が分析される。饗宴では輸入食料を主とする食事と現金や輸入タバコを主とする贈与品を参加者に振舞うことが必須である。主客間あるいは参加者間の対抗意識が露になる機会でもあれば、同時にそれまでの敵対関係を友好関係に転換する機会ともなる。著者の観察では、饗宴は稀少財である輸入物品の均等な再分配の機能を負う。と同時に、行政村・教会・学校等の新たな社会集団を核に建設された集会所で催される饗宴は、既に解体してしまった伝統的親族集団がかつて担っていた機能を補完し、多様化する構成要素が交雑する現在の社会生活において平等性の社会原理を日々再生産していることが指摘される（179ページ以降）。そして、「二重の窮乏」下の逆説とも言える饗宴＝浪費は、輸入物品が底をつく状態にあっても、とにかく、手

元にあるその残滓を平等に分配し、それによって内部の統制を維持する機会として執拗なまでに繰り返されていく。

第 4 章では、平等性が貫徹し難い集会所の外の世界を対象に、在地の所有観念の検討が行われる。著者によれば、N 村社会では個人的な所有が必ずしも排他的な占有を意味せず、個人が所有する物資は常に他者からの懇請 (*bubuti*) や他者による介入・領有の可能性に晒されている。つまり、集会所の饗宴を離れた世界では、非排他的所有の原理が物資の分散化と平準化を促しているというのだ。しかし、人々は他者の懇請を素直に受けて、疑うことなく平等性の原理に追従している訳ではない。日常生活において、ある場合には物資を秘匿し、またある場合には鷹揚に振舞うというように、物資をめぐる個人的な駆け引きに細心の注意が払われ、それによって眼前の窮乏を回避して個人的状況の最適化を図る巧みな実践の並存が指摘される。

第 5 章では、平等性が卓越する社会において、この原理に反するかのように勃興してきた個人商店や小規模商売の事例が取り上げられる。これまで N 村では、「二重の窮乏」下の物資欠乏を解決すべく、「人々のため」と称して数多の個人商店が起業されてきた。しかし、個人商店の存在は結果として特定個人への財の集中と物価高を引き起こし、羨望と嫉妬の渦の中で、今では消失を余儀なくされてしまった。著者は個人商店の盛衰を分析して、タビテウエア・サウスでは「資本の論理」が浸透しながらも、個人の突出した蓄財を拒絶する在地の「贈与の論理」が優越性を保つことを見出した。「贈与の論理」が許容する範囲、つまり、平等性の原理に抵触せず、個人の突出した蓄財の回避と物資の低価格での安定供給が実施される限りにおいて、「資本の論理」が選択的に受容される。在地の論理が「資本の論理」を包摂する過程として、この指摘は非常に興味深い。

第 6 章では、政治経済学的に構造化された「二重の窮乏」と社会の自律性の関係を考察する。著者は、「最周辺の周辺」国のさらに離島であるタビテウエア・サウスは「窮乏を外的条件として構造的に押し付けられた上」に、「自らの手で窮乏状況に対応せ

よ、と命じられ」たも同然の状況にあり (267 ページ)、従って、自律性の課題は、外部への依存すら地政学的に困難な状況で、「いわば資本に突き放された形で強制された」不可避のものとして人々の上に押し掛かっていると言う。この指摘に関わって、タビテウエア・サウス社会の自律性を支える平等性と集会所を中心に作動する集団のメカニズムが、外部から移入されたキリスト教的理念とイギリス植民地統治期に再編された新たな社会集団をもって、歴史的に形成されたことを見据える必要を説く。著者が強調するのは、タビテウエア・サウスの自律性は、決して「辺境に昔ながらの平等社会が残った」結果ではなく、当該社会の人々が外部世界に包摂された挙句に最周辺化される過程で、彼らの行為主体性をもって外部世界の要素を選択的に受容し、さらに劇的な社会の再編成を実施した結果なのだという点である (269~272 ページ)。この行為主体性の発露こそが、巨視的な世界システムによってもたらされた「二重の窮乏条件」下にある社会の自律性の核として示されるべきものであろう。ここで、懇請・秘匿・振舞・羨望・嫉妬を孕む個人の「窮乏の回避」をめぐる最適化実践 = 行動選択の分析 (第 4 章・第 5 章) が、行為主体性の議論として平等性と集団のメカニズムの分析に直列してくる。著者はこれを踏まえて最後に「二重の窮乏」下における在地論理を「窮乏に対する平等性モデル」(282~283 ページ) として定式化し、それによって「窮乏の回避」をめぐる行動選択を軸とした最周辺の周辺のさらに周辺に生起する社会編成の研究を一般性の高い議論に仕立てたうえで擲筆している。

本書に対する評者の評価は、既にも上記 2 節で適宜示してきた。本書が中部太平洋の環礁社会の、いわば現在性 (actuality) の民族誌として第一級の仕事だということは明らかである。と同時に、最周辺の周辺のさらに周辺に位置する社会を捉えてその実相を見極めていく作業が果たす貢献は、太平洋の一地域社会研究を超えて多大なものがあると言える。

グローバル化を対象とした研究の多くにおいて、それらが中心の論理とその論理の周辺への拡張過程の解明に力点を置くのは当然かもしれない。しかし、周辺から中心を捉えるという作業や周辺の世界の特質を杓子定規な図式的予見を排して描くという作業が蔑ろにされてきたことは否めない。本書は、グローバル化の波に吞まれた周辺世界を主体性の喪失において犠牲者に仕立てるのでもなく、周辺世界の受動性の図式を転換するために、ただ徒に周辺世界の主体性を絵空事のように讃美するのでもない。強制と創造の双方を中位で睨み、最周辺の周辺のさらに周辺に胎動する行為主体性の構築過程を執拗なまで

に活写していく。ここには広義の経済開発を「下」から突き上げていく自立的発展の問題を考えるための重要な示唆がある。紙幅が尽きたが、著者が「貧困」ではなく「窮乏」を鍵概念にしたことの意味も十全に咀嚼されるべきであろう。

グローバル化する世界の総体を見極めるためにこそ、微細な社会の動向に身を定めてみる。このことの重要性を改めて明確に示してくれたのが本書なのである。

(東京都立大学人文学部助教授)